# スパイダーマン　ラン　アランド　テラ

ルーデリアン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは龍門、世界的な大都市だ。

そこに、一人の少年がいた。

彼の名はピーター。

この大都市に住む普通の少年だ。

しかし、彼にはもう一つの顔があった。

それは彼が「スパイダーマン」であるということだ。

# 目　次

第一話「親愛なる隣人」――――――――――――――――1
第二話「僕はスパイダーマン。」――――――――――――7
第3話「雷撃パニック、スパイダーマン危うし。」――――――13

# 第一話「親愛なる隣人」

ここは、龍門のスラム。そこで、子供たちがチンピラに囲まれていた。

「このガキ！やっと見つけたぜ。」

「まって、この子たちには手を出さないで。」

「あぁ、何だぁ。俺に指図するのかこの病気やろうが。」

一番年上であろうウルサスの少女は感染者の様だ。感染者とは鉱石病にかかってしまった人間全般のことを言うが、詳しくはここでは言わない。ただ、全体的に差別されているということは覚えていてほしい。龍門にも感染者差別がある。ウルサス帝国と比べるとまだましだろうが、それでもひどい事はあるのだ。もっとも、それ以外の子供たちは感染者ではないらしいが。

だからと言って、子供を虐げるのは許されることなのだろうか？いやない。この龍門でもそんなことをやれば、「奴」が来るからだ。

男たちは、子供を庇った少女を殴ろうとした。が、少女が殴られることはなかった。何故なら、男の手に白い何かが張り付きそのまま、男の手を固定したからだ。

「な、何が起こった。」

「いや、弱い者いじめをするのってどうなの？欲求不満なら、もっといい場所があるよ。」

「な、誰お前は！」

いきなり現れたのは、赤と青の網目模様のあるボディスーツのような服を着た上にマスクをした怪しい存在だった。服装だけでも怪しいが、こいつはなんと壁に張り付て現れたのだ。その存在、「奴」は自身をこう名乗った。

「親愛なる隣人！スパイダーマン！」

「す、スパイダーマンだと！なんでこんなところに。」

「どうだっていいでしょ、そんなこと。僕としてはその子たちから離れて欲しいんだけど。」

男たちのフラストレーションは、すでに限界になろうとしていた。

せっかく、八つ当たりが出来ると思っていた矢先に邪魔が入ったのだ。こいつをぼこぼこにしなければ気がしまないのだろう。
「なんだとてめぇ！俺たちは病気野郎どもからこの街守ってんだ！」
「君たちが、この街を守る方法があるよ。リゾートホテル（刑務所に出頭）に宿泊することだ。」
「て、てめぇ！」
　チンピラの一人がスパイダーマンに殴ろうとする。だが、スパイダーマンには当たらなかった。
「おっと、いきなり殴ってくるなんて危ないなぁ。カルシウム足りてる？」
「ざけんじゃねぇ！」
　チンピラの一人が棒で殴ろうとするが、その前にスパイダーマンの手首の装置から、白い糸のような物体、ウェブが射出された。それは、男の手、顔、足に命中し、そのまま男を拘束した。
「野郎！」
　男は拘束した奴を含めて、五人いた。ただのチンピラだが、何をしでかすかは分からない。スパイダーマンは油断も隙もさらさなかった。
「おら！」
「よっと。」
「そら！」
「ほっと。」
「どら！」
「あらよっと。」
「くそ、当たらねぇ！なんだよこいつ！」
「これじゃ、僕を倒すどころか薬も売れないんじゃない？」
「な、何で知ってんだクソ！」
「僕はいろいろ知ってるんだ。」
　チンピラどもは、スパイダーマンの言葉に動揺してしまった。
　パシュ！
「うげ！」

「いっちょ上がり、これで後二人。」
「お、おいこれヤバいんじゃないか？」
「そうだぜ、トンずらしちまお」
「とんかつは美味しいよね。」
「うわ！」
　いつの間にか回り込んだ、スパイダーマンがチンピラの一人をぶん殴り、気絶させた。
「うげ！」
「こうなりゃ、やけだ！俺のアーツを喰らいな！」
　そう言うとチンピラは、杖のような物を取り出した。俗に言うアーツユニットである。男が、何やら詠唱のような物を言い出した。すると、アーツユニットから炎が出て、スパイダーマンに一直線に飛んできた！
「おっと、火遊びもできるわけ？」
「ほざけ！」
　チンピラは正確にスパイダーマンを狙い、炎を飛ばしていく。しかし、スパイダーマンは、それを紙一重に避けていく。近くのドラム缶が炎に直撃し、ドロドロに解け始めた。
　スパイダーマンが、チンピラたちの攻撃を躱し続けられるのには理由がある。まず、チンピラたちの練度がそんなに高くないというのも理由だが、もう一つの理由としては、スパイダーマンには、危機を察知できる「スパイダーセンス」がある。ゆえに、どこまで攻撃しようとも、スパイダーマンには避けられるということである。
「くそ、なんであたんねえんだ！」
「理由は簡単だよ。」
　スパイダーマンがそう言うと、チンピラがアーツを使う前にウェブを連射した。ウェブはすべてチンピラに直撃し、身動きが取れなくなってしまった。
「うご、うごご。」
「リゾートホテルの優待客だからさ。」
「さてと、ええとたしか、「この者、薬物売買」と。」

スパイダーマンは、カードに呟いたことを書き、拘束したチンピラに投げつけた。
「大丈夫かい？」
「え…あ、ありがとうございます。」
「いや、僕は当然のことをしただけだよ。朝に歯を磨かなきゃいけない程にね。それじゃあね、龍門のおまわりさんたちが来るから離れたほうが良いよ。」
そう言うと、スパイダーマンはウェブを発射し空中を移動した。
「…スパイダーマン。」
少女は、そう呟くと他の子を連れその場から離れることにした。

「…スパイダーマン。また奴に先を越されましたね。」
「ああ、本当に何者なんだ。」
それから、数十分後。二人の女性が先ほどぼこぼこにされた、チンピラたちを見てそう言い放った。片方の女性は緑の髪とかなり高い背丈が特徴であり、もう片方の女性は青い髪と頭から生えている二本の角が特徴だった。彼女たちは、龍門近衛局の特別督察隊であり、髪が青い方が隊長のチェン、髪が緑の方がチェンの部下であるホシグマである。
「チェン隊長。これを。」
「ああ、すまない。「この者、薬物売買」か。確かに、最近、薬を売っているギャングの特徴にかなり似ている上に、懐から薬が出てきた。」
「奴は、私たちよりも先に事件を解決してしまうことが多いですね。」
「このままじゃあ、龍門近衛局のメンツが丸つぶれだ。ホシグマ、奴の調査を続けるぞ。」
「了解。」
チェンはカードの後ろに何か書かれていることに気が付いた。そこに書かれてあったのは…
『P・S少し休んだらどう、お巡りさん。』
「…お前のせいで休めないんだ。」

チェンはそう呟くと鑑識にカードを渡し、現場を調査するのであった。

ここは、スラム街の裏路地。誰いないようなところでスパイダーマンは休憩していた。

「疲れちゃうよ、銀行強盗はあったし、鼠王から聞いた薬の売人に出会うし、なんか売人が子供いじめてたし。」

「だが、そのおかげで龍門の均衡は保ててるわい。」

「…ああ、鼠王さんか。」

スパイダーマンが鼠王と呼んだ男は、ぱっと見は老いぼれたザラックのように見えるが、実はこの龍門の大物マフィアである。しかし、マフィアでも基本的にはいい人なのでスパイダーマンとは敵対はしていない。むしろ、情報をスパイダーマンに提供している。

「あの、うっとうしい売人が消えて精々したわい。まあ、それはいいか。ありがとう。お前のおかげで儂は動かずに済む。」

「いえいえ、こちらこそ。あ、飴を一つください。」

「はい、そういえばウェイの奴がお前さんのことを探しとるぞ。」

「僕をマスコットにしたいのかな?」

「多分、違うと思うぞ。」

裏路地に男二人の笑い声が響く。今日も龍門は平和である。

「わ、分かりましたから、お願いです。許してください!」

チンピラらしき男が、フードを被った男に命乞いをしていた。フードの被った男は、考えるようなそぶりをしてこう言い放った。

「よし、スパイダーマンを始末しろ。そうすれば命だけは助けてやる。」
「す、スパイダーマンを！」
「出来ないか？」
「で、できます。やって見せます！」
フードの男は少し笑って言った。
「奴さえいなければ、俺の計画も進む…」
Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

# 第二話「僕はスパイダーマン。」

やあ、僕の名はピーター。しがないアルバイターさ。
ブーン
僕は、スクーターでピザのデリバリーをしていた。ところで僕が働いているピザ屋は割と時間にルーズなことがあるんだよ。
ドガン！
…こんなことが多いからね。
「ヒャッハー！金を沢山ゲット！ずらかるぜ。」
「「アイ、アイサー！」」
あ～あ、なんでよりによって白昼堂々強盗なんかしてんのかな。もっと、夜の方にやった方がいいのに。でも、止めなきゃね。え、お前アルバイターじゃないのかって。ああ、そういえば言い忘れていたね。僕には秘密がある。僕は…
「やあ、諸君。今日もいい天気だね。」
「な、誰だお前は！」
「親愛なる隣人！スパイダーマン！」
そう、僕はスパイダーマンだ。
「スパイダーマンだと。へ、俺たちとやろうってのかい。俺は元害虫駆除人だぜ。」
「害虫駆除は僕も得意だよ。特に強盗という害虫は。」
「言わせておけば！」
鉄パイプと、火炎瓶で武装しているけど。まあ、一話を見ている君ならわかると思うけどこれくらいの強盗程度なら。
「ごめんなさい、もうしません。」
「これで、反省した？なら刑務所でバカンス楽しんでね。」
ほら、この通り。まあ、毎日こんなことが起きているってわけ。僕は、龍門近衛局の無線とかを傍受して現場に行っていることが多いけど、目の前で起きることも少なくはないね。
ピーポーピーポー
おっと、近衛局だ。僕もこの場から離れないと。

パシュ

僕はいろいろやらなきゃいけない。バイトに勉強にスパイダーマン活動、本当に忙しいよ。おかげでまともに自炊ができなくて、今日もカップ麺だ。

「ん？」

そこにいたのは、昨日助けた女の子だ。僕よりも年下だろうその少女は、やや痩せており余り健康的とは言えない。また、昨日のチンピラのことを考えると彼女は感染者なのだろう。僕が住んでいるアパートはスラムに近くて、ピザ屋に出勤するためにはスラムを進まないといけないんだ。まあ、スラムにはそれなりに感染者はいるし、あまり気にしたことないけど。

「君、どうしたの。」

僕は彼女に話しかけた。彼女から見て僕は赤の他人だが、僕は彼女に手を差し伸べたかった。

「えっと、私は…」

彼女は戸惑っていた。恐らく、ずっと一人で生きてきたんだろうね。スラムにはそんな奴は悲しいけどいる。僕みたいな奴の方が少数だ。

「…何でもないです。」

どうやら、僕にちょっとだけ警戒しているようだ。まあ、無理もないか。昨日の今日だ。警戒するなというのが無理な話だ。ならば作戦変更だ。僕は鞄からある物を取り出した。

「はい。」

「…？これは。」

僕が彼女に見せたのはチョコチップクッキーだ。バイト先の先輩からもらったものだ。彼女はおずおずとクッキーをもらうとそのまま食べだした。

「…おいしい。」

「それは良かった。」
　彼女が少し微笑んだような気がした。よっぽどお腹がすいていたのかもしれない。
「僕はピーター、ピーター・パーカー。君の名前は？」
「…シャ。」
「え？」
「…ミーシャです。」

　ミーシャは、つい最近龍門に来たばっかりで、今は子供たちと暮らしていたらしい。彼女の寝泊まりしている所に案内してもらったけど、屋根すらないという状態だった。だから僕は、ウェブの原液を使った段ボールでちょっとした家を作ったよ。水に濡れても大丈夫な上に、かなり丈夫に作ってある。
「す、すごい。何ですかこれ、本当に段ボールなの。」
「段ボールだよ。特別性だけどね。」
　ミーシャも気に入ってくれて何よりだ。

「…でも何で助けてくれたの？私は」
「いや、気にしないよ。僕は君が困ってそうだったからね。」
「うん、でも…」
「…おじさんも、そうしたはずだ。」
「え？」
「あ、いや何でもない。おっと、いけない。僕これから用事があるんだった。またね！」
　僕は「用事」のために一旦、家に帰ることにした。

　僕は今、スパイダーマンとしてパトロールをしている。近衛局の無線だけでは限界もあるからね。さてと、今日は特に異常はな『スパイ

ダーマンはどこだ！』
　うわ、びっくりした。いきなり大声で叫ばれるとびっくりするよ。スパイダーセンスも激しく反応しているし。僕は声のする方に顔を向けてみた。そこには…
　…武装しているごついトレーラーが道路を爆走していた。
　トレーラーの荷台には、チンピラやモヒカンが乗っていて、手榴弾やボウガン、大砲であたりを破壊しまくていたって、これ出る作品違うでしょ！
「やっほー、僕のことを呼んだ？」
「スパイダーマンだ！攻撃しろ！」
　ドーン！ドーン！
「うわ！危ない！君たち、僕のためにサプライズをしてくれたのはいいけど、いくら何でも激しすぎない!?」
「知るか！タコ！」
「てめぇを殺せばどうとなる。やれぇ！」
　ドーン！ドーン！
　いつものチンピラじゃあなさそうだ。時速８０キロで走行している車に追い掛け回されながら戦わなきゃいけないて、どういうことなの。
「…まあいいか、この車を止めればいいだけだ。」
　ピーポーピーポー
『そこのトラクター、止まりなさい！』
「誰が、止まるか！タコ！」
　もっと早く来て欲しかったな。さて、これで奴らは挟み撃ちにされているけど…
『大至急、応援を！パトカーが一台やられた！』
「近衛局の連中も大したことないなぁ。」
　…早く止めないと。よし、せっかくだし新型ウェブでも使うか。
「いいぞ、このま」

パシュ！
「うげ！」
「な、早い！」
「まあまあ、ここは落ち着いて。せっかちな男は嫌われるよ。」
今、発射したのは「インパクトウェブ」。通常のウェブの数倍のスピードと密度で飛んでいき、着弾すると人一人は包み込んで拘束できる。今みたいにね。
「生意気なこと言いやがって。お前ら！スパイダーマンに集中砲火しろ。」
「大変です！ボス！」
「なんだ！」
「いつの間にか、武器が無くなっています。」
「何だと！」
「あそうそう、君たちのアクセサリー似合わなかったから僕が回収しておいたよ。」
「な！こいつ…」
パシュ！パシュ！パシュ！
僕はトラクターの荷台にいる奴らを次々に捕まえといたよ。ひい、ふう、みい、よし！これで全員かな。あとは運転席の奴らを…え！
「おい見ろ！こっちに突っ込んでくるぞ！」
「嘘！逃げないと！」
「ママァー！どこー！」
なんてこった！あいつらトラクターをこのままビルに突っ込ませる気だ！急いで車止めないと！
僕はすぐさま運転席の奴らを気絶させて、ブレーキを引こうとしたけどこのトレーラーにブレーキがついていなかった。
しょうがない、プランPをするか。まずは、トレーラーの先端に立ち、力ずくでトレーラーを止める！この手に限る！
「うおぉぉぉぉ！」
あと、１００ｍ。持ちこたえろ！
あと、８０ｍ。まだ、止まらない！

あと、５０ｍ。なんで、止まらないんだ！
あと、３０ｍ。いい加減にしろ！
あと、１０ｍ。止まってくれ！

あと、３ｍ。やっと止まってくれた。
「はぁ、はぁ。な、何とかなった。」
「ああ、そうだな。」
僕は声のする方に顔を向けてみた。そこにいたのは、龍の少女だ。
僕は何度か見かけたし、何なら話したこともある。
「や、やあ、チェン隊長。」
「スパイダーマン。すでに連中は逮捕している。お前もついてきてもらいたい。」
やっぱりか。ま、したかがないか。でもそのまま付いてったら、スパイダーマン活動ができなくなるだろうから…
「表彰状は欲しいけど、僕は忙しいんだ。また今度ね！」
パシュ！
「あ、待て！」
さて、逃げるか。

「…ただのチンピラじゃあ無理だったか。」
でも、考えてみたらこれが始まりだったかもしれない。
「奴らはすでに龍門に入国している。あとは見届けるだけだ。」
…僕の人生でもっとも、過酷な戦いが。
Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

# 第3話「雷撃パニック、スパイダーマン危うし。」

コツ　コツ　コツ
「…えらく、簡単に入国で来たな。」
キャプリニーの青年はそう呟いた。
「…龍門は、もっと厳しいと思ったんだが、まあいい。」
青年はビルのモニターを見て少し笑った。
『スパイダーマンについてですが、正体は何者なのか分かりますか。』
『私が思うに…』
「楽しくなりそうだ。」

ピーターはアルバイトから帰宅した後、ある場所に向かった。ミーシャたちのところである。
「やあ、ミーシャ。」
「あ、ピーターさん。」
ピーターは、様々な食材が入った紙袋を段ボール製のテーブルに置いた。
「いつも、すみません。私たちのためにここまでしてくださって。」
「いや、気にしなくてもいいよ。別に僕が勝手にやってることだしね。」
ピーターはここ数日、ミーシャのところに通いミーシャたちの面倒を見ていた。
「それにしても、よくこんなに資材集められますよね。この段ボールもそうですけど、電気が通ってるし、冷暖房もしっかりしてます。」
「ああ、僕は機械いじりが得意だからね。この段ボール手作りだし。」
「え！手作り何ですか！」
「ああ、そうだよ。」
「…すごいです。これなら、大企業に行ってもかつやくできる。」

「いやそれほどでも。」
「まあ、かなりの化学オタクだしね。」
「うお！ハリー!?」
　ピーターの隣にいたのは、金髪の鬼だった。顔立ちはそれなりに整っており、ピーターと比べるとやや上品ないでたちである。彼の名はハリー。ピーターの親友である。
「…あなたは？」
「すまない、お嬢さん。僕の名はハリー。ピーターの友達さ。」
「は、ハリー。いつからいたの…というか、どうしてここに！」
「たまたま、見かけただけだよ。ピーター、ここで何してるんだい。」
「えっと、それは…ああ、ここのことは誰にも内緒にしてくれ。」
　ピーターはハリーに彼女とのいきさつを語った。
「そうなのか。いや、聞いて悪かったな。」
「まあ、ね…一旦この話は終わりにしよう。ところで、ハリーは今何をしてるんだ。お父さんの会社に就職とか？」
「いや、今は国際トランスポーターやってるんだ。」
「へえ、そうなのか。じゃあ、どんな国に行ってきたんだ。」
「ボリバルとか、クルビアが多いかな。ボリバルは本当にひどくてさ、どこもかしこも戦場だよ。クルビアは、たくさん物が売っていてでもその分高かったよ。あと、ウルサスで、」
　バツン！
「あれ、停電か？」
「みたいだね。ちょっと発電機を見てくるよ。」

「よし、直った。この発電機、安物のパーツで出来ているからすぐにオーバーヒートしちゃうんだよなぁ。」
　ピーターは、発電機を修理して、すぐに段ボールハウスに戻った。
「ハリー、ミーシャ。発電機直ったよ。」
「変だな。」
「ん、どうしたの。」

「それがテレビをつけても、真っ暗なままなんです。」
「え、そうなの。困ったな、ちょっとパーツ買いに行ってくる。」
「分かりました。気を付けてください。」

「ピーターも相変わらずだな。ここの家作ったの、ピーターなんだろ。」
「ええ、身寄りもない私たちに、しかも感染者である私に何故かやさしくしてくれました。」
「…そうか、じゃあ、ゴホ！ゴホ！」
「だ、大丈夫ですか！」
「ああ、平気さ…」

ピーターはジャンクショップに向かっていた。しかし、ピーターはどこか違和感を持つようになっていた。
（あれ、なんでビルのモニターに何も映ってないんだ。）
ビルのモニターだけでなく、信号機や店の照明など、電気を使うようなものは、何故か使えていないようだ。
「おい、どうなってんだ。」
「これじゃあ、商売あがったりだ。」
「停電かしら。」
ピーターは、何だか胸騒ぎがした。そこで、盗聴器で近衛局の通信を聴くことにした。
（何も起きていませんように…）
『緊急時多発生。発電所で男が立てこもっている模様。至急応援を頼む。』
（結局、これか。ま、チンピラだろうし、大丈夫だろ。）
ピーターは、すぐさまスパイダーマンに変身することにした。

キャプリニーの青年は、いら立っていた。別にうまくいかないからではない。むしろうまくいきすぎているから、いら立っているのである。戦闘不能になった特別督察隊の隊員を蹴飛ばして大声で叫んだ。
「どいつもこいつも、雑魚ばかり。これじゃあ、何のためにわざわざ停電を起こしたんだ！」

「そこのお前、手を上げろ！」
キャプリニーの青年は手を上げながら、後ろに振り返った。そこにいたのは、チェンであった。
「…貴様は他の奴らとは違いそうだ。」
「感染者か。しかもその顔、リターニアのノーブルキラーか。」
「ノーブルキラーだと！俺は、そんなちゃちな奴じゃない。俺をエレクトロと呼べ！」
「そんなことはどうでもいい、お前を逮捕する。」
「へ、できるものならなぁ！」
エレクトロは、手のひらから電撃を発射する！チェンはそれを剣で防ぐ！
「な、この威力！」
「おい、お巡りさん！この程度で、へばるなよ！」
「く！」
チェンは剣を持ち直し、エレクトロに向きなおした。チェンはエレクトロに突撃していった！彼女は近衛局の中でもトップクラスの実力者である。エレクトロのこの電撃は躱すことができる。
バリバリ！バリバリ！
エレクトロの雷撃は、ドラム缶に直撃し、ドラム缶を爆散させた。
「ち、当たらねえ！だがこうでなくちゃなぁ。」
チェンは、電撃をうまく躱していきエレクトロに近づいていく。
（思ったより、粗削りだったな。確かに威力は脅威だったが、これならば一人でも対処できる。）

エレクトロはチェンに向けて、電撃を連射していた。だが、エレクトロとの距離はもうすぐそこである。チェンがすぐにでも、抜刀できるような状況であり、すぐにでも仕留められる位置にいた。
「はぁ！」
チェンは剣を振り下ろし、エレクトロに攻撃を加えた！
バリリリリ！
「あががが！」
だが、ダメージを喰らったのはエレクトロではなかった。攻撃を加えたはずのチェンが電撃でダメージを受けていた！
「残念だったな、あれは分身だ。」
エレクトロは、咄嗟に電気で出来た分身を作り出し、チェンに分身を攻撃させたのだ！
「うぐ、い、いつの間に。」
「ついさっきさ。てめぇが剣で切ろうとした瞬間にだ！つい思いついてやってみたが、うまくいったぜ。」
（こ、こいつ！ただの術者じゃない！今の思いついてやれるような技術じゃない！なんなんだこいつは！）
チェンは、もう一本ある鞘に入れたままの剣を抜こうとした。しかし、何故か抜くことが出来なかった。
（やっぱり、抜くことが出来ないか！こんな時に！）
「おい、どうした！まさかここで、逃げるとか言い出すんじゃないだろうな！」
「それはこちらのセリフだ。」
エレクトロは攻撃を再開する。今度は電撃が曲がっている！
バリバリ！バリバリ！
「く、ここまで厄介な奴だとは！」
「お褒めに預かり光栄だ！」
龍門にここまでのアーツの使い手はいるだろうか。念のために言うと、彼は一か月前にアーツを使い始めたばかりである。
（だが、倒せない相手じゃない。）
チェンは回避に専念しつつ、エレクトロに注視した。いくら、電撃

を連射できるからとはいえ、隙は出来る物である。分身に警戒もすればすぐに見破れるようなものである。
「ほらほらほらほら！」
「……」
エレクトロは、電撃を連射した。しかし、チェンは攻撃を受け流した。
（まだだ。）
「ち、なら。」
エレクトロは地面に直接電撃を流した。だがチェンは垂直跳びをし、回避した。
（まだ、こらえろ。）
エレクトロは、最大出力で電撃を放った。
（いまだ！）
「はぁぁぁ！」
チェンは、一瞬の隙を見てエレクトロに飛びかかった…だが！
ザク！
「な…！」
チェンの足に刃物が突き刺さった。その拍子にチェンは転んでしまった。
「しま！」
もう遅い、エレクトロの雷撃がチェンに直撃しようとしていた。

「危ない！」
バリバリ！
チェンが雷撃に触れそうになった瞬間、赤い何か通り過ぎていきチェンを電撃から守った。
「お前は…」
「チェン隊長、大丈夫？」
「だ、大丈夫にきまって、うぐ。」
「…ここは僕に任せて！」

「あ、おい、待て！」
「誰だ！せっかくの戦いを邪魔したのは！」
「ここだよここ。ほら、君から見て後ろ。」
「てめぇか。」
「そう、親愛なる隣人！スパイダーマン！」
　スパイダーマンはエレクトロにウェブを発射し、拘束を試みた。
「そんな、糸切れで俺を倒そうってのか！」
　だが、ウェブはエレクトロの電撃によって簡単に溶けてしまった。
「おっと、そのアーツ持ってるのに、電気代けちってるの？」
「てめぇに分かるわけもないがな！」
　エレクトロは目標をスパイダーマンに変更した。
「ちょっと、乱暴すぎない？もっと、優雅にしないと。」
「貴族どもは、いつもそんなことを言う。強くもない癖になぁ！」
「そういえばさ、名前聞いて無かったよね。僕は名前を言ったのにそれじゃあ不公平じゃない？」
「エレクトロと呼びな！俺はただてめぇが強けりゃいいだけさ。」
　バリバリ！
（これは、まずいかも。もし、電撃に当たったらお陀仏だ。）
　スパイダーマンは三次元の動きで、電撃を回避していく！
「君凄いね！これくらい強かったら、もっといい仕事見つかるんじゃないの？」
「てめぇと戦ってる方が良いぜ。」
　エレクトロに、電流が走る！スパイダーマンは、回避の体勢をとる！
「くらいな！」
　エレクトロを中心に強大な落雷が発生！スパイダーマンは吹き飛ばされてしまった。
　咄嗟に受け身を取るスパイダーマン！そこに追撃を仕掛けるエレクトロ！
「く、もうやめにしない？みんなに迷惑だよ？」
「知るか！そんなこと！」

スパイダーマンはインパクトウエブを放とうとする。だがその前にエレクトロの電撃がシューターに直撃する。
バチバチ！
「しまった！シューターが！」
「オラ！」
スパイダーマンはエレクトロに殴られそうになったが、寸でのところで回避した。
（…これ、僕勝てるのか？チェン隊長も心配だし、一緒に逃げたほうが良いのかもしれない。でもこいつを放置すると、何をしでかすかわからな）
バン！
「動くな！近衛局だ！」
現れたのは、ホシグマが連れてきた応援だ。
「団体客のご登場だね。どうする？このまま戦ってもいいけど。」
「上等だ。まとめて…！」
いきなりエレクトロが頭を抱え始めた。さっきの暴れっぷりから忘れていると思うが、彼は感染者である。余談だが、彼の源石融合率は1％くらいである。
「くそ、こんな時に！覚えてろ！」
エレクトロが閃光を放ち消えていた。ついでにスパイダーマンも消えていた。
「チェン隊長！」
「すまないホシグマ。不覚を取った。」
「足にナイフが突き刺さってる…大丈夫ですか！」
「ああ、大…うっ！」
「大丈夫じゃなさそうですね。一旦、病院に行って検査を受けるべきです。」
「…ああそうだな。」
（…スパイダーマン。奴に助けられたな。）

「今の、装備じゃだめだ。」
一方、スパイダーマンことピーターはミーシャたちにテレビが使えない理由を語り。解散後、スーツとウェブの強化を計画していた。
「まずは、あの電撃。何とか回避できたけど、万が一当たったらやられる。だから、スーツに耐電性を付けるのが良さそうだ。あと、あの電撃でシューターを壊されたから、改良しないと。」
ピーターは、天才である。スーツの改造と、シューターの改造くらい簡単にできる。
「スーツの素材から変える必要がありそうだ。ゴムとかが良いんだろうけど、ただのゴムだとすぐにダメになるだろうから、質のいい物じゃないとだめだろう。でもそれ以上に問題なのは、シューターの方。どうやったら電撃に耐えることができるだろう。」
ピーターは自問自答しながらスーツの改造、シューターの実験を行っていた。特にシューターの方はかなりの失敗を重ねており、シューターに磁力を持たせるというアイデアが浮かび上がるのには三時間以上かかった。
そして…
「よし!完成だ。今までのスーツと違って、表面はラバー製だから、エレクトロの電撃を喰らっても、2，3発は耐えることができる。しかも、防御力もアップだ!ウェブは磁力で、電撃喰らっても故障しない!しかも、ついでに新しいウェブも追加できた!その名はスパークウェブ!これなら、何とか戦えそうだ。あとは…」
『事件発生、ノーブルキラーが交差点で破壊活動を行ってる。至急、応援を』
スパイダーマンは、アパートの窓から飛び降り、現場に向かうのであった。
「オラオラ!どうしたどうした、そのていどか?」

エレクトロは、ビルや車などを電撃で適当に破壊している。近衛局も対処しているが、エレクトロの規格外のアーツにパトカーを吹き飛ばされるのを見ることしかできないでいる。
「く、応援はまだなの。あのバカドラがいないのにどうしてこんなやつがいるの！ああ、経費がふきとんでく～」
そう嘆いてるフェリーンの女性は、近衛局に所属している、スワイヤー警官である。チェンとはライバルと言えばいいか、腐れ縁と言えばいいのかよく分からない関係である。スワイヤーはメガホンを持ち直し、エレクトロに呼びかける。
「ノーブルキラー！今すぐに破壊活動をやめなさい！」
「俺はエレクトロだ！その名前で呼ぶな！」
「じゃあ、エレクトロ！今すぐに破壊活動をやめなさい！」
「じゃあ、俺と戦おうぜ！」
「あいにくだけど、一対一で戦うつもりはないわ。」
「スワイヤー警部、ただいま到着いたしました。」
「ちょうどいいところに来たわね、各隊！配置につけ！」
スワイヤーの号令を聞いた、隊員たちは、ポジションにつき戦闘を開始しようとしたが…
「だ、ダメです！アーツが強すぎて近寄れません！」
「前衛がやられた！くそ、どうしろってんだ！」
「狼狽える場合じゃないわ！体勢を整えて！」
フォローすると、彼らは優秀だ。ただエレクトロがそこいらの犯罪者のレベルを超えているだけのことであり、更に、まだ民間人がまだ避難しきっていないのも苦戦を強いられている理由である。
「もっと、戦わせろ！これ以上ない最高の」
「じゃあ、僕と戦う？」
「!?」
「稲妻より早く！磁力より強い男！スパイダーマン！」
「てめぇか、俺と戦いに来たのか。」
「まあ、そうだけど。でも、その前に。」
スパイダーマンは、壁にウェブを発射して明後日の方にスウィング

した。
「僕を捕まえることが出来たらね。」
「な!?てめぇ、待ちやがれ!」
なぜか、宙に浮き高速移動を始めたエレクトロ。そのまま、スパイダーマンを追いかけ始めた。
「…いや、あんたたちも追いかけなさい!」
「「りょ、了解!」」

「いや、こんな感じで夜の街もいいと思わない。誰かさんのせいでめちゃくちゃだけど。」
「知るか!そんなこと。」
「だよね、君ってそんな奴だったな。」
スパイダーマンはエレクトロから逃げていた。「ヒーローが逃げるなんてどうなんだ。」という人がいると思うが、結構理にかなっているのである。というのも、まず、まだ避難していない民間人がいたのに加え、いくらスパイダーマンの装備が整ったからと言って、エレクトロとの力の差はまだあるのである。
(一番いいのは、あそこに誘い込めることだ。ばれないようにしないと。)
スパイダーマンはエレクトロの攻撃を回避しながら、エレクトロをある場所に誘い込もうとしていた。
「てめぇが、逃げ回るんなら俺だって考えがある。」
エレクトロはそういうと、指を空に向けアーツを発動させる。
「天よ、すべてに裁きを!」
ドガン!
刹那、空から落雷が発生し、スパイダーマンにおそいかかる!
「うぉ、危ない!これで、へそが取れたらどうするんだよ。」
「てめぇの体ごと、焼いてやるから安心しろ。」

エレクトロは、落雷のアーツを連射する。
ドガン！ドガン！ドガン！
スパイダーマンはスパイダーセンスでギリギリ回避できているが、それでも少しかすってしまう。
「これ、スーツをラバーにしたの正解だったかも。」
「くそ、いい加減沈めよ！」
（まだだ。まだ、この時じゃない。）
エレクトロはいまだに電撃を連射している。
「ねえ、なんでこんなことしようと思ったの？」
「てめぇ、みたいな強い奴と戦えるからさ。」
「それだったら、プロレスに出場したほうが良かったんじゃない。」
「そんなことできるかよ。」
「だめだこりゃ。」
スパイダーマンはスイングで道路の右に曲がる。ようやく目当ての物が見えたようで、壁に張り付いて急停止した。
「ああ、そろそろ鬼ごっこはやめにしようかな。」
スパイダーマンは、エレクトロにウェブを発射した。
「何度やっても、意味ねえんだよ！」
エレクトロは、ウェブに電撃を放つ。
「な、なんで焼き切れねえんだ！」
「ああ、君のためにちょっと改良したんだぁよ！」
ウェブがエレクトロに直撃し、スパイダーマンはそのまま力任せにある物に叩きつけた！
ドゴン！
「うぐ!?や、やりやがったな。」
「まあね。次はどうする？水遊びでもする？」
「誰がそんなこ!?な、何故だ！うまくアーツが操れねえ！」
「水は良く電気を通すのは、知ってるよね。余りに通し易くて流れちゃいけないところにも流れちゃうことも。」
「き、貴様！最初からこれを狙っていたのか！消火栓を壊して俺に水をぶっかけることを！」

スパイダーマンは地面に着地し、エレクトロに向き合った。
「ああ、そうだよ。でも、まさかここまでうまくいくとは思わなかったけど。」
「調子に乗るなよ！」
エレクトロは、スパイダーマンに殴ろうとした。だが、スパイダーマンは、殴られる前に、カウンターを決め、二メートル吹き飛ばした！
「ぐお！」
パシュ！
更にウェブを発射し、その勢いでエレクトロに急接近し、ストレートをかました！
「うげ！」
そして、アッパーカットでフィニッシュした。
「あら！」
エレクトロは気絶し、戦闘不能になった。
「…なんか、とんとん拍子でうまくいったけど、ひょっとしてこいつ…アーツ以外そんな大したことなかったのかも。」
スパイダーマンはエレクトロが起き上がってこないことを確認し、ウェブで簀巻にして、拘束した。
「よし、あとは近衛局の皆様にバトンタッチだ。」
スパイダーマンはその場から去った。

「いない!?」
「ええ、スパイダーマンとエレクトロの戦闘の痕跡があったのですが、肝心の双方がいないんですよ。」
「スパイダーマンは、すでに離脱したときいたわ。エレクトロは誰かが、奴を助けたのかしら。」
「今のところは、まだ。」
「なら、いいわ。」

スワイヤーは、現場を見渡してため息をついた。
（なんだか、嫌な予感がするわ。後で予算の申請をしなきゃ。）
その嫌な予感は的中すると知るのは、後の話である。
Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ